

ソローのエコソーシャル・ヴィジョンと野生果実の行方

伊藤詔子

はじめに——ボタニスト、ソローの複層する植物表象

地球が人新世(Anthropocene)の時代に突入したという認識は社会の隅々に浸透してきた。Timothy Morton の『ハイパーオブジェクト——世界の終わり後の哲学と生態学』も説くように、人類と文明とそのリソースである地球の崩壊の危機は、すでに「引き返せない地点」に来ているとされている。人類と文明対地球、human/nonhuman の関係性をテーマとするソロー(Henry David Thoreau)の文学は、人新世の明確な加速期、アメリカの市場経済拡大と産業革命期に形成され、ソローは預言的に野生地とその生きもの喪失、再生の兆しと方策を絶えず模索した。David Foster の『ソローの土地と変容する風景の旅』も明らかにしたように、宅地開発、鉄道建設、家屋建設、燃料など森林経済の木材需要で、特にアメリカ東部の山野には大きな破壊的変化があった。ソローは “There is, no doubt, apparent analogy between the human and the vegetable, both in the body and the mind.” (*Journal* May 20, 1852) と考え、特に野性植物の喪失を憂慮した。また拙論で論じたように Charles Darwin の *On the Origin of Species* との出会いが起きる 1860 年 1 月以降、短い生涯の晩年は、唯一の歴史としての自然史構築に向かった。ソローの植物表象は、Princeton 版テキスト *Excursions* の自然史作品 9 作のテーマとなっているが、これらは奴隷制とメキシコ戦争を中心にめぐるソローの改革文書と並行交錯して書かれた。ソローの植物表象には抵抗のポリティックスが内包されエコソーシャル・ヴィジョンが示される。さらに死後編集された手稿作品 *Faith in a Seed: The Dispersion of Seeds* (1993)、*Wild Fruits* (2000) には、他のジャンルと重層的に、種子の考察と野生果実の土地の歴史と予見が記述されている。ソローを後継する最近の作品にも触れて、3 章に分けて考察する。

1. 喪失の樹木

樹木小説として注目されている Richard Powers, *The Overstory* (2018) は、ソローの *Journal* と手稿作品からの多くの引用で物語を紡ぐ、ソローの botanical imagination のポストモダンの継承である。20 世紀にはアメリカの山野から消えた栗について、ソロー *Journal* 1855 年 10 月 23 日の記述 “Now is the time of chestnuts. . . . Old trees are our parents, and our parents’ parents, perchance. If you would learn the secrets of Nature, you must practice more humanity.” から Powers, *The Overstory* は始まり、アメリカの樹木史をふまえた物語が始まる。ソローの自然記述は自然領域の後退を嘆く一方で、植物の開花と落花と散種、芽吹きの詳細な観察による植物の development への確信を強めようとする。*The Overstory* でもテーマとなっているペーター・ウォールレーベン『樹木たちの知られざる生活』にある「植物の言葉」がソローにも聞かれている。

This evidence of forethought, this simple reflection in a double sense of the term, in this flower is affecting to me as if it said to me. Even I am doing my appointed work in this world faithfully. Not even do I however obscurely I may grow among the other loftier & more famous plants shirk my work humble weed as I am. . . . I am not ashamed to be contemporary with the Norway Cinquefoil. May I perform my part as well! It is as good as if I saw the great globe go round. . . . I can be said to note the flowers fall only when I see in it the symbol of my own change. When I experience this then the flower appears to me. (*Journal* August 31, 1851)

ここにはソローの botanical imagination 全般にわたる特質がある。1) 花は言葉を持っていて心の耳を澄ますと聞こえる。2) ある種が、次に行う花を咲かせる 1 年の仕事と成果(development)は、人間の内的変化の象徴となる。3) 植物と人間は宇宙の動きと繋がっている。4) この動きを認識するとき花は花として立ち現れてくるのであり、ソローの花の認識は双方向的な現象学的なものであった。以上の特質はソローの樹木、果実も特徴づけているが、樹木の場合にはそこに歴史性と政治性が加わっている。ソローの植物表象考察は、*Journal* にしばしば描かれる樹木の伐採シーンが重要だ。1856 年 1 月 22 日のジャーナルで、コンコードの町の標識ともいべき独立戦争前からのニレ(elm)の大木伐採が決まった日のソローの弔辞の記述がある。エルムの死を悼み「私たちが過去と結びつけてきたもう 1 本の年輪の輪が、今断ち切られました。いかに多くを古のコンコードはこの大木から引きはがされたことか。」(*Journal* January 22, 1856) と記した。Davis Elm と名付けられた木を citizen と呼んで独立戦争を戦ったコンコードの市民であるとする。Thomas J. Campanella, “Henry David Thoreau and the Yankee Elm” によると「ソローの著作では、コンコードのニレは、奴隷制の拡大に関する議会の優柔不断に対応して結成された自由土地党(Free-Soiler)と、abolitionism の隠喩である」(Campanella 27)。

2. 改革文書とエコソーシャル・ヴィジョン

自然史作品とは対極にあるとみなされてきた改革文書の嚆矢をなす「市民の不服従」(原題 “Resistance to Civil Government” は1866年版で “Civil Disobedience” に改題) は、後に『ウォールデン』の中心的章となる11章のタイトル「より高き法則」(Higher Laws) という語が、『ウォールデン』より早くでてくるテキストである。また L.D. Walls は、「市民の不服従」を “gateway to his environmental ethics” と呼び、『ウォールデン』と「市民の不服従」の一体性を指摘する (Walls 254)。市民の不服従(CD)は文中でもまた最終節でも、唐突とも見える果実の表象——“A State which bore this kind of fruit, and suffered it to drop off as fast as it ripened, would prepare the way for a still more perfect and glorious State, which also I have imagined, but not yet anywhere seen.” (Reform Papers 89-90) ——で論を締めくくるのである。ソローはここで国家を君主制から民主制に段階的に捉え、個々の人間の権利と尊厳に基づく国家となるプロセスを、個人も隣人としてふるまう国とし、それを、果実が実れば落下し、皆がそれを分有する国、つまり自然の原理と社会の原理が一体的に動くエコソーシャルなヴィジョンを提示している。上のジャーナル記述で見た花の務めを他者にも勧めている。エコソーシャルの国家は大樹であり、その果実を隣人は拾い分け合うのである。「市民の不服従」のあとも1854年アンソニー・バーンズ逮捕事件について、州や議員や新聞への激しい呪詛ともいえる「マサチューセッツ州の奴隷制度」を書く。しかしここでも作品最後に white water-lily の香りと表象が救済として再度提起されている。ソローのエコソーシャルなヴィジョンの実現可能性は、次章の考察と、ソローを後継する文学に委ねられる。

3. 種子から果実へ——*Faith in a Seed* と *Wild Fruits*

“Faith in a Seed” という語は、“The Succession of Forest Trees”からの一文にあり、*Faith in a Seed* のエピグラフにも置かれている。種子から果実への動きは予型と対型の関係にあり、隣人をめぐる「思想」は、*Wild Fruits* でも野山の果実を隣人と呼び、ヒューマン、ノンヒューマン境界のない世界をソローは natural community と呼ぶ。様々なハックルベリーの歴史を追うことで、アルゴンキン等ネイティブ部族の土地を追って白人との戦争の歴史も蘇らせ、人々が果実を摘み食することは自然と一体化する communion の意義をもつが、手稿は未刊で、絶筆となった「野生リンゴ」が鍵となる。

Selected Works Cited:

Campanella, Thomas J. “Henry David Thoreau and the Yankee Elm.” *Arnordia* (Arnold Arboretum of Harvard University) 61:2 (2001), 27-31.

Dispersion: Thoreau and Vegetal Thought. Edited by Branka Arsic, New York: Bloomsbury Academic, 2021.

Forster, David. *Thoreau's Country: Journey through a Transformed Landscape*. Harvard UP, 1999.

Higgins, Richard. *Thoreau and The Language of Trees*. U. of California P, 2017.

Morton, Timothy. *Hyperobjects: Philosophy and Ecology after the End of the World*. Minnesota UP, 2013.

Powers, Richard. *The Overstory: A Novel*. W. W. Norton, 2018. 木原善彦訳『オーバーストーリー』新潮社, 2019.

Thoreau, Henry David. *The Journal of Henry David Thoreau*. Edited by Bradford Torrey and Francis H. Allen, Houghton Mifflin, 1962. 14 vols in 2 vols.

———. *Faith in a Seed: “Dispersion of Seeds” and Other late Natural History Writings*. Edited by Bradley P. Dean. Washington DC.: Island/Shearwater, 1993. 伊藤詔子訳『森を読む——種子の翼(よく)に乗って』宝島社出版, 1995.

———. *Wild Fruits*. Edited by Bradley P. Dean. New York: Norton, 2000. 伊藤詔子、城戸光世訳、『野生の果実』松柏社, 2002.

———. *Excursions. The Writings of Henry David Thoreau*. Edited by J. J. Moldenhauer, Princeton UP, 2007.

———. *Reform Papers. The Writings of Henry David Thoreau*. Edited by Wendell Glick, Princeton UP, 1973.

Walls, Laura Dassow. *Henry David Thoreau: A Life*. Chicago UP, 2017.

伊藤詔子『「種の起源」と「種子の拡散」——ダーウィンとソロー』『英語青年』(1980年8月号), 1-5.

———. 『よみがえるソロー——ネイチャーライティングとアメリカ社会』柏書房, 1998.